『源氏物語』薫の「きよら」考

岸　ひとみ

【要旨】『源氏物語』横笛巻において、光源氏が幼い薫に対して、「かれはいとかやうに際離れたるきよらはなかりしものを」と思ったことが記され、薫に、実父の柏木にはない「きよら」を見出している。薫は成人してからは「きよげ」と評され、「きよら」は否定されている。

従来から、薫におけるこの美的評価の変更は、語り手によるものだと捉えられてきた。しかし、これは源氏が薫を評したものであり、語り手の意図によって変えられたと解する前に、源氏がなぜ薫を「きよら」であると思ったのか、その意識を考察した。

語り手（草子地）において、人物を「きよら」または「きよげ」だとした場合は、物語の中の客観的評価である。しかし、登場人物が特定の人に対してそう思った場合は、その人物の主観による評価なので、その者の意識が作用している。源氏が特定の人の顔に対して「きよら」と思う場合には、自分の顔が意識されている。

薫に対して用いた「きよら」という語が、源氏に、薫が柏木の子ではなく、自分の子だという意識を喚起している。源氏が薫を我が子と思えるようになったことで、薫は物語の主人公性を継承することになる。

【キーワード】源氏物語、きよら、きよげ、視点

はじめに

横笛巻において、柏木の一周忌を迎えた後、源氏が幼い薫に対して、「かれはいとかやうに際離れたるきよらはなかりしも

のを」（『新編日本古典文学全集』横笛巻349頁）と、薫に、実父の柏木にはない「きよら」があると思っている。「きよら」は、「第一流の気品ある美、華麗さ、贅美をいう」とされ、「源氏物語では多く天皇・皇族のこと・ものについていう。キヨゲが第二流の美をいうに対する語」とされている。(1)

確かに、成人した薫は、「顔容貌も、そこはかと、いづこなむすぐれたる、あなきよらと見ゆるところもなき」（匂兵部卿巻26頁）と、「きよら」がないとされている。(2)

薫は源氏に「きよら」と評されたにもかかわらず、後に語り手によって、「きよら」ではないと記されており、相反する評価が存在する。

先行研究を確認すると、長野まり子氏が、「あな清ら、と見ゆる所もなきが（二十八頁下段参照）この一文では、前編に二箇所あるのを含めて、今まで薫に使われていた〝清ら〟がすべて否定され、草子地の見る薫像、柏木の息子としての薫が示されているのである。そしてこれ以後、薫への評価がすべて〝清げ〟で統一されている事を考える時、薫は清らではない、という草子地の評価（略）これはそのまま作者自身の評価であり、物語の方向を示すもの」とされ、(3)三枝秀彰氏は、「第二部と第三部の間で薫の造型はくい違うわけであるが（略）薫における主題の変更がそれを要請した」とし、「変更された新たな主題とは（略）薫が柏木の宿命を重要な問題として担わされた」と論じられている。(4)いずれも作者の意図により、柏木の血を受け継ぐ薫ということで「きよら」がないことに変更されたと解しているようである。(5)

横笛巻で薫を「きよら」だと評したのは源氏である。語り手が、薫には「きよら」がないとして、美的評価を変更したと解する前に、源氏がなぜ薫を「きよら」と思ったのか、その意識を検討する必要があろう。人物に対する評価は、語り手による場合と登場人物による場合とで、両者を同列に論じることに疑問を持つ。(6)

そこで、本論では、まず、登場人物が人に対して「きよら」または「きよげ」と思った用例において、その登場人物の意識を探りたい。(7)その上で、源氏が特定の人に対して「きよら」または「きよげ」と評した用例を取り上げ、源氏がどのような意識を持ってその言葉を使ったかを検討し、薫の「きよら」を考察する。

一、登場人物からの「きよら」と「きよげ」

語り手以外の者が、特定の人に対して「きよら」や「きよげ」と思った場合に、どのような意識が作用しているかを見ていきたい。源氏には、「きよら」と評された用例が十八例存在する。[8] しかし、登場人物が源氏を「きよげ」だと思っている用例が、二例ある。[9]

まず、玉鬘が源氏に対して「きよげ」としている用例である。[10]

①わづらはしき気添ひたまへる人ぞや。人の心やぶり、ものの過ちすまじき人は難くこそありけれ」など、活けみ殺しみいましめおはする御さま、尽きせず若くきよげに見えたまふ。（蛍巻203頁）

これは、源氏が玉鬘のところを訪れ、蛍兵部卿宮について、「わづらはしき気添ひたまへる人」と悪く言っている。新編頭注で、「玉鬘への懸想心のためだが、その中途半端な状態で玉鬘は六条院に釘づけされることになる」と記されている。源氏の「活けみ殺しみいましめおはする御さま」と、玉鬘が蛍兵部卿宮に接することについて、源氏が矛盾した態度を示すことに対し、「若くきよげに見えたまふ」とされている。地の文ではあるが、その後に「と姫君思す」（蛍巻204頁）と続いており、玉鬘の視点である。

用例①に続いて、「をかしくおぼゆる薫りなども、思ふことなくは、をかしかりぬべき御ありさまかな」（蛍巻204頁）との記述があり、「思ふこと」とは、新編頭注では、「源氏から言い寄られる悩み」とされている。玉鬘はその悩みがなければ、源氏の衣装にたきしめた薫りもどんなにか素晴らしいとあるので、思い悩んでいるために、薫りはそうではないと感じている。玉鬘が源氏の自分に対する想いに悩み、不快に思っている。同じ薫りでも、玉鬘の意識によって受け止め方が変わってくる。

そうなると、玉鬘にそのような苦悩がなければ、源氏を「若くきよら」だと思うであろう。源氏が親にはあるまじき態度をとり、それに悪感情を抱く玉鬘にとって、源氏の姿は「きよら」ではなく、「きよげ」に映っている。源氏は、玉鬘の養父という立場を逸脱している。

そこで、玉鬘が源氏を「きよら」だと評した用例を取り上げたい。

②御心の中には、いにしへ思し出づることども、さまざまなりけむかし。いと若くきよらにて、かく御賀などいふこと

は、ひが数へにやとおぼゆるさまの、なまめかしく人の親げなくおはしますを、　（若菜上巻56頁）

これは、源氏の四十の賀で玉鬘が源氏と対面した場面である。用例①から四年が経過しているが、玉鬘が源氏を「若くきよら」だと思っている。この時点では、源氏と玉鬘の関係は過去のものとなり、玉鬘は髭黒と結婚し、子が二人いる。源氏は玉鬘に対して養父として接しているので、「きよら」とされたのであろう[11]。

この点について、福井佳代子氏が、用例①について「「くつろぎの状態」で、しかも、視点人物が身内であれば、さすがの光源氏であっても、「きよら」にはならない」として、「二人の関係は発展する可能性も十分にある状態」とするが、用例②は「外部からの視点であり、恋が発展する余地が一切ない二人の関係」として、「身内」と「外部」という視点で論じられている[12]。

確かに、用例①は、源氏がくつろいでいる場面である。他の用例で「御容貌、このごろいみじく盛りにきよげなり」（浮舟巻148頁）と、匂宮に対して、語り手が「きよげ」と描写している。匂宮は源氏の孫で皇子であり、これ以外は「きよら」と評されている。これは、匂宮が「作文会」で帝を前にして詩を献上する場面であり、「くつろぎの状態」ではない。ゆえに「くつろぎの状態」であることで「きよげ」になるとは必ずしもいえない[13]。

また、薄雲巻で、源氏が大堰を訪問するために着飾り、紫の上に出かける挨拶をする際に、「隈なき夕日にいとどしくきよらに見えたまふを、女君ただならず見たてまつり」（薄雲巻438頁）とされ、身内である紫の上の視点から、源氏を「きよら」としている。身内かどうかという関係性よりも、むしろそのように見ている者の意識とするべきである。

次に、源氏に対して「きよげ」としたもう一つの用例を見ていきたい[14]。

③また寄りて見れば、もの聞こえて、大臣もほほ笑みて、見たてまつりたまふ。親ともおぼえず、若くきよげになまめきて、いみじき御容貌の盛りなり。　（野分巻266頁）

これは、六条院に野分が襲来し、夕霧は見舞いに来て、たまたま紫の上を垣間見た。そこに、源氏が現れ、二人の様子を目にした場面である。「親ともおぼえず、若くきよげになまめきて」とされ、息子の夕霧が、源氏を父親とも思えず、「若くき

よげ」と思っている。夕霧から、紫の上に対しては、この前で「気高くきよらに、さとにほふ心地して」（野分巻265頁）と「きよら」としながら、源氏には「きよら」とはなっていない。

その後に、「大臣のいとけ遠くはるかにもてなしたまへるは、かく、見る人ただにはえ思ふまじき御ありさまを、至り深き御心にて、もしかかることもやと思すなりけりと思ふに、けはひ恐ろしうて」（野分巻265頁）とあり、夕霧は、源氏が紫の上のあまりの美しさのために、自分を遠ざけていたのかと思って、そら恐ろしくなったと感じている。この感情は、夕霧が父である源氏に対して通常抱く気持ちと異なっている。源氏は親であるのに、夕霧が紫の上に接近するのを警戒し、若者のように紫の上に接する源氏の姿は、夕霧には親とも思えず、衝撃を受けたであろう。夕霧はそんな源氏を「きよげ」と意識したといえよう。[15]

語り手からは「きよら」と評されている源氏が、玉鬘と夕霧には「きよげ」と映っている。親子関係を逸脱している源氏に対して、両者が負の感情を持つことで、源氏の様子を「きよげ」であるとし、逆にそのような気持ちを抱かなければ、「きよら」と思うであろう。

二、源氏による「きよら」と「きよげ」

本章では、源氏が、人に対して用いた「きよら」、「きよげ」という美的語彙について、どういう意識を持っているか見ていきたい。まず、源氏が自分自身に対して「きよら」としている用例を取り上げる。[16]

④わが御影の鏡台にうつれるが、いときよらなるを見たまひて、手づからこの赤花を描きつけにほはしてみたまふに、かくよき顔だに、さてまじれらむは見苦しかるべかりけり。姫君見て、いみじく笑ひたまふ。（末摘花巻306頁）

⑤御鬢かきたまふとて、鏡台に寄りたまへるに、面痩せたまへる影の、我ながらいとあてにきよらなれば、「こよなうこそおとろへにけれ。この影のやうにや痩せてはべる。あはれなるわざかな」とのたまへば、女君、涙を一目浮けて見おこせたまへる、（須磨巻173頁）

両用例ともに、源氏が、地の文で鏡に映った自分の顔を見て、「きよら」と思っていることが記されている。[17]④の用例は源氏が無邪気な紫の上と戯れている場面で、鏡の中の自分を「きよら」であるとして、自分の鼻に赤い紅粉をつけて紫の上と遊ん

でいる。用例⑤は、須磨に退去することになり、二条院で紫の上と別れを惜しむ場面である。鏡に映されたやつれた顔を、「我ながらいとあてにきよらなれば」として、自画自賛している。このような状況でも、源氏は自身を「きよら」であると思っている。

さらに用例④では、「姫君見て」と、用例⑤は、「女君、涙を一目浮けて見おこせたまへる」とあり、共に紫の上は源氏の顔を見つめている。源氏は鏡で自分の顔を見ていると同時に、傍にいる紫の上も、直接自分の顔を見ており、そのことを源氏はわかっていよう。

これらから、源氏は、少なくとも自分とそっくりな顔は「きよら」であり、顔が「きよら」だと思った時には、同様に感じる別の人物の存在を意識しているようである。

次に源氏が夕霧に対して、「きよら」、「きよげ」であると評した用例を取り上げる[18]。

⑥御前に参りたまへれば、かのことは聞こしめしたれど、何かは聞き顔にもと思いて、ただうちまもりたまへるに、いとめでたくきよらに、このごろこそねびまさりたまへる御盛りなめれ、さるさまのすき事をしたまふとも、人のもどくべきさまもしたまはず、鬼神も罪ゆるしつべく、あざやかにもの清げに若う盛りににほひを散らしたまへり、

（夕霧巻471頁）

⑦殿の、御鏡など見たまひて、忍びて、「中将の朝明の姿はきよげなりな。ただ今はきびはなるべきほどを、かたくなしからず見ゆるも、心の闇にや」とて、わが御顔は古りがたくよしと見たまふべかめり。（野分巻275頁）

用例⑥は、夕霧が落葉の宮を一条宮に移して通っているという噂について、源氏は、知らぬふりをして夕霧を見つめている場面である。源氏が二十九歳の夕霧に対して、「きよら」としている。夕霧は、語り手から「別々にては、同じ顔を移しとりたると見ゆる」（藤裏葉巻444頁）と、源氏と顔がそっくりだとされていた[19]。源氏の心内文で、自分に瓜二つの夕霧を「きよら」と思っている。

さらにこの後に「女にて、などかめでざらむ、鏡を見ても、などかおごらざらむ、とわが御子ながらも思す」（夕霧巻472頁）と記され、新編頭注で「落葉の宮も夕霧を愛していることだろう」とある。源氏は落葉の宮が夕霧の顔に心を奪われるだろうと思っており、落葉の宮の存在も意識している。この部分でも、

「鏡」が登場している。[20]

続いて「さるさまのすき事をしたまふとも、人のもどくべきさまもしたまはず」に対して、夕霧は「もの清げ」と評されている。「清げ」に、接頭語の「もの」が付いており、対象は夕霧の姿である。姿は、衣装や態度、雰囲気などが合わさったものなので、顔に対する評価と異なっても矛盾はない。

用例⑦では、源氏が、十五歳の夕霧を「きよげ」だと紫の上に話している。その前に「殿の、御鏡など見たまひて」と、源氏が自分の顔を見た後で、夕霧の「朝明の姿」に対して「きよげなりな」としている。さらに「心の闇にや」として、親の欲目のような言い方である。これに対して、語り手から「わが御顔は古りがたくよしと見たまふべかめり」と、自分の顔はいくつになってもきれいだと思っているようだと評されている。[21]

夕霧は、主として「きより」とされた人物であり、[22]「きよげ」としたのは、語り手以外では源氏と落葉の宮である。[23]「朝明の姿」とは、新編頭注で「女の許から朝帰ってゆく男の姿をいう歌語」と記されている。この場面では、夕霧は風の見舞いに来ている。源氏は、夕霧が紫の上に近づくことを警戒しているので、紫の上を意識した言葉である。源氏が本心から夕霧の姿に対して「きよげ」と思っているとはいえない。夕霧は源氏と瓜二つであり、この直前に源氏は鏡で自分の顔を見ているので、夕霧の顔は「きより」だと感じ、姿も同様と思っているであろう。

以上により、源氏は、少なくとも自分にそっくりな顔であれば「きより」と思い、その言葉を使うときは、同様に「きより」と感じる特定の女性の存在と「鏡」を意識しているといえそうである。[24]

三、薫の「きより」

薫を「きより」だとしている用例は三例である。登場人物の視点では、源氏と夕霧によるものだけである。[25]まず、冒頭に出した該当用例を取り上げる。

⑧頭は露草してことさらに色どりたらむ心地して、口つきうつくしうにほひ、まみのびらかに恥づかしうかをりたるなどは、なほいとよく思ひ出でらるれど、かれはいとかやうに際離れたるきよらはなかりしものを、いかでかからん、宮にも似たてまつらず、今より気高くものものしうさまことに見えたまへる気色などは、わが御鏡の影にも似げなか

らず見なされたまふ。　（横笛巻349頁）

これは、柏木の一周忌が過ぎ、「若君は、乳母のもとに寝たまへりける、起きて這ひ出でたまひて、御袖を引きまつはれたてまつりたまふさまいとうつくし」（横笛巻349頁）と、乳母のところで寝ていた薫が起きてきて源氏にまとわりつき、源氏が薫を愛しく思った後の心内文である。

源氏が薫を見て、「口つきうつくしうにほひ、まみのびらかに恥づかしうかをりたるなどは、なほいとよく思ひ出でらる」と、源氏の視線は、薫の口もとや目もとに注目し、柏木に似ているという思いである。続いて、「かれはいとかやうに際離れたるきよらはなかりしもの」と、柏木には薫ほどの格別の「きよら」はなかったと感じている。

さらに、「いかでかからん、宮にも似たてまつらず」と、女三の宮にも似ていないし、薫の器量はどこから来るのだろうかとして、「わが御鏡の影にも似げなからず」と、自分の鏡に映る顔にも似ていないでもないという思いに至っている。源氏は今までも薫の器量が抜きん出て優れていることは意識に上っていたが、初めて薫が自分に似ているように感じている。

次は夕霧からのものである。

⑨二藍の直衣のかぎりを着て、いみじう白う光りうつくしきこと、皇子たちよりもこまかにをかしげにて、つぶつぶときよらなり。なま目とまる心も添ひて見ればにや、まなこゐなど、これはいますこし強う才あるさままさりたれど、眼尻のとぢめをかしうかをれるけしきなどいとよくおぼえたまへり。口つきの、ことさらにはなやかなるさましてうち笑みたるなど、わが目のうちつけなるにやあらむ、　（横笛巻364頁）

この前に、夕霧が「この君をまだえよくも見ぬかなと思して」（横笛巻364頁）と記述されているので、この場面では夕霧が薫の顔をじっと見つめている。最初の印象は、「皇子たちよりもこまかにをかしげにて、つぶつぶときよらなり」として、明石の女御腹の宮たちと比較をして、それよりも美しくまるまると肥えていて「きよらなり」と思っている。夕霧は薫の顔だけでなく、衣装や体つき、肌の色を含めて全体の姿も見ている。続いて、「眼尻のとぢめをかしうかをれるけしきなどいとよくおぼえたまへり。口つきの、ことさらにはなやかなるさましてうち笑みたるなど」と、目じりの切れや笑ったときの口もとが柏木に似ているとしている。

しかし、「なま目とまる心も添ひて見ればにや」、「わが目のうちつけなるにやあらむ」と、薫が柏木の子ではないかと思ってみるから、似ていると思うのかと自問自答している。夕霧は、薫が柏木の子だろうかと疑念を持つも、「いかでさはあるべきことぞと、なほ心得ず思ひよる方なし」（横笛巻365頁）と、確信が持てない。

夕霧は、薫が柏木や皇子よりも美しいと思うも、そこに源氏に似ているという意識はない。「まなこゐなど、これはいますこし強う才あるさままさりたれど」と、眼差しなどが柏木よりも優れているとしている。薫の美しさを感じた後に、「子と名のり出でくる人だになきこと、形見に見るばかりのなごりをだにとどめよかしと泣き焦がれたまふに聞かせたてまつらざらむ罪得がましさ、など思ふも」（横笛巻365頁）として、柏木の父親に意識が移っている。この点は、源氏が五十日の祝いの時に、薫が柏木に似ているとした後に、「親たちの、子だにあれかしと泣いたまふらむ」（柏木巻324頁）と呼応している。

また、「この君は、いとあてなるものから、さまことにをかしげなるを、見くらべたてまつりつつ」（横笛巻365頁）と、夕霧は薫に取り分け高貴な美しさを見出している。その前で、皇子だから気高いと思ってしまうが、顔を見るとそれ程でもないとしているので、自分の思い込みによって見え方が変わることを意識している。夕霧が意識する「きよら」とは、具体的にどういうものかは描かれていないが、柏木や皇子よりも美しいし、源氏の子であるから「きよら」であるという意識が働いているのであろう。

源氏は、薫には「気高くものものしうさまことに見えたまへる気色」があるとし、夕霧と同様に薫に気高く並外れた美しさを感じている。源氏と夕霧は薫について同じような美的評価をし、口つきと目もとが柏木に似ていると思っている。

しかし、薫が「きよら」であることについて、異なる点がある。源氏は、薫の顔を柏木と比較して、柏木には薫ほどの「際離れたるきよら」はないとし、夕霧は薫の姿が「つぶつぶときよら」と思っている。

さらに、その後に続く意識も、両者で異なる。柏木に似ていることについて、夕霧は、薫が柏木の子かどうかは確信が持てないので、気のせいかもしれないと思っている。一方、源氏は柏木の子であるのがわかっているのに、自分に似ている気がすると思っている。

同じように薫を見つめながら、源氏と夕霧で見え方が異なるのは、各々の意識によるものであろう。源氏は実子でない薫に対して、なぜ「顔がきよら」とし、「わが御鏡の影にも似げなからず」と思ったのか。ここに源氏の隠された意識がありそうなので、次章で見ていきたい。

四、薫の「きよら」における源氏の意識

薫の五十日の祝いの際にも、次の用例にあるように、源氏は薫が柏木に似ていると思っていた。前章の用例⑧における源氏の意識と、どのような違いがあるのか見ていきたい。

⑩大将などの児生ひほのかに思し出づるには似たまはず。女御の御宮たち、はた、父帝の御方ざまに、王気づきて気高うこそおはしませ、ことにすぐれてめでたうしもおはせず。この君、いとあてなるに添へて愛敬づき、まみのかをりて、笑がちなるなどをいとあはれと見たまふ。思ひなしにや、なほいとようおぼえたりかし。ただ今ながら、まなこゐののどかに、恥づかしきさまもやう離れて、かをりをかしき顔ざまなり。（柏木巻323頁）

⑪まみ口つきのうつくしきも、心知らざらむ人はいかがあらむ、なほ、いとよく似通ひたりけり、と見たまふに、（柏木巻324頁）

この場面において、源氏は薫が誰に似ているかということに意識が向いている。夕霧の幼い頃の顔にも似ていない。明石の女御腹の宮たちと比べると、宮は気高いが美しくはない。薫は「いとあてなるに添へて愛敬づき」と、薫の方が気品があり、美しいとしている。

「まみのかをりて、笑がちなるなどをいとあはれと見たまふ。思ひなしにや、なほいとようおぼえたりかし」、「まみ口つきのうつくしきも、心知らざらむ人はいかがあらむ、なほ、いとよく似通ひたりけり」と、薫の笑った時の目もとや口つきが柏木に似ていると思っていた。この点は、用例⑧と同じである。

薫の顔について、同じような印象を持ったにもかかわらず、五十日の祝いの折は、柏木にこれほどの「際離れたるきよら」はないという思いはなかった。ここでは柏木と薫の顔を比較している。これは、源氏の意識が異なるからである。拙稿にて、横笛巻の薫の「知らず顔」において、源氏は、薫を柏木に似ている不義の子として見るのではなく、柏木と切り離して独立した存在であるという意識に変わったことを論じた。[26]

五十日の祝いの時は、柏木に似ているかどうかということに源氏の関心が向かった。用例⑧では、薫が柏木に似ているという思いは変わらないが、薫を柏木と重ねてみるのではなく、両者を並べ、薫が柏木よりも格段に優れていると感じている。柏木には「かやうに際離れたるきよら」はなかったと意識して、柏木の顔を思い浮かべ、薫が「きよら」であると思っている。これは、薫を見て単純に「きよら」だというのとは異なる。(27)

源氏は、薫を柏木と比べて、薫に格別に優れた美を見出し、それは誰から受け継いだのだろうかと、思いを巡らす。薫は女三の宮にも似ていない。源氏が、もしかすると、薫は自分に似ているのではないか、そうであればいいのにと思うと、自分に似ているように見えてくるであろう。

大山正氏が、視覚心理学の立場から、見る人の意識によって見え方が異なってくることを論じられている。(28) 人間は目で見ているのではなく、脳で見ているので、見る人の意識のバイアスがかかる。同じものを見ても、意識によって見え方に相違が生じてくる。源氏が薫を見た時に、柏木に似ているのではないかと思って見るのと、愛情が湧いてきて自分の本当の子であればいいのにと思って見るのでは、見え方が異なってくる。

源氏は、自分にそっくりであれば「きよら」だと意識することを既述した。自分の顔を意識して薫が「きよら」だという思いを抱いたのではない。薫を柏木と対比することで薫に「際離れたるきよら」があると思った。それが契機となり、自分の顔に意識が移る中で、「今より気高くものものしうさまことに見えたまへる気色」として、薫が自分に似ていなくもないだろうという思いにつながったといえそうである。

ここでも「わが御鏡の影」として、「鏡」が登場している。今まで源氏が用いた「きよら」とは異なり、柏木に似ているが、柏木にはない「際離れたるきよら」を薫に感じたことから自分の顔と「鏡」を呼び起こしている。

源氏が意識する「きよら」には、特定の女性の存在があることを既述した。この点について、「今よりいとけはひことなるこそわづらはしけれ。女宮ものしたまふめるあたりにかかる人生ひ出でて、心苦しきこと誰がためにもありなむかし」（横笛巻350頁）という記述に注目したい。この「女宮」とは、新編頭注で「明石の女御腹の女一の宮」とされている。ゆえに該当用例の薫の「きよら」という語句において、源氏が女宮を意識しているといえそうである。

さらに、源氏の薫が自分に似ているという意識を裏付けるものとして、次の用例の「ゆゆし」という言葉に注目したい。

⑫月日にそへて、この君のうつくしう、ゆゆしきまで生ひまさりたまふに、まことに、このうきふしみな思し忘れぬべし。この人の出でものしたまふべき契りにて、さる思ひの外のこともあるにこそはありけめ、のがれがたかなるわざぞかし、とすこしは思しなほさる。（横笛巻351頁）

これは、「月日にそへて」と、該当用例の場面から季節が移り、源氏が薫に対する思いを述べている場面である。源氏は、「この君のうつくしう、ゆゆしきまで生ひまさりたまふ」と、薫の美しさに「ゆゆしき」という語句を初めて用いている。[29] 源氏も幼き頃に、「いとどこの世のものならずきよらにおよすけたまへれば、いとゆゆしう思したり」（桐壺巻37頁）として、「きよら」とともに「ゆゆし」という語句が用いられていた。[30]

「ゆゆし」については、新編頭注で、「あまりに美しいものは鬼神に魅入られるという俗信からの発想」とされている。この意味での「ゆゆし」は、源氏の実の子である冷泉帝、夕霧、明石の女御が赤子の頃にも用いられている。[31]「ゆゆし」も源氏系の美の特徴である「きよら」と同じ性質のものといえる。源氏の美しさを表現する言葉として、「ゆゆし」という語が目立って使われているが、その語句を源氏が薫に対して使用していることは、自分に似ているという意識の表れであろう。

源氏は、薫への愛情が増すことと相まって薫の見え方が変わり、薫の実父が柏木であるという意識が薄れて、我が子のように思っている。源氏が薫に対して用いた「きよら」という語句は、薫が実の子に思われるという源氏の意識を喚起し、物語の主人公が源氏から薫に継承されることを示しているであろう。

おわりに

従来の研究史では、横笛巻において薫が「きよら」とされるも、成人後は「きよげ」となり、薫の「きよら」を否定したのは、語り手で、薫に対して変更がなされたと解してきた。

薫が「きよら」だと思うのは、語り手ではなく、源氏なので、本稿では人が「きよら」や「きよげ」であると、登場人物に映った場合に、そのように評した者の意識を考察した。その結果、基本的に「きよら」と形容された人物に対して、臨時的に「きよげ」が用いられたり、その逆の状態が生じたりするのは、そう評価した人の主観によるものであるため、その者の意識が

関与していると推論した。

そこで、人の顔に対して「きよら」と評した源氏が、どういう意識を持っていたのかを見ていくと、自分にそっくりであれば「きよら」であると思うと同時に、そこには特定の女性の存在と「鏡」があった。

源氏が薫を「きよら」と思う根底には、源氏の薫への意識の変化がある。源氏が薫を柏木から切り離して、独立した存在として受け入れた。そのことにより、源氏は薫に柏木にはない「際離れたるきよら」を見出した。「きよら」という語から自分の顔を想起する中で、「わが御鏡の影にも似げなからず」と自分に似ているように思い、実の子と意識することに変化したと解したい。

ゆえに、作者が薫の造形を「きよら」から「きよげ」に変更したのではない。

薫に対する源氏の「きよら」という語句は、薫が柏木の子ではなく、自分の子という意識を喚起している。源氏が薫を我が子と感じるように変化したことで、薫が物語の主人公性を継承することになる。

〔注〕

（1）『岩波古語辞典　補訂版』一九九一年一月

大野晋氏は、『源氏物語』における「きよら」と「きよげ」について、「天皇家の人々、あるいは第一級の人物と扱われる人々は概して「清ら」で形容される。それに対して臣下であるもの、あるいは血統の低いと見なされるもの、または二流扱いされる人物は「清げ」で形容されている」と論じられている（「ⓓの物語」『源氏物語』（岩波書店）一九八四年五月）。「きよら」を第一級、「きよげ」を第二級と区別したのは、『日本語の年輪』（新潮文庫）一九六六年五月が初出である。二つの語句を一級、二級と一律に区別することに疑問を持つ。「きよら」、「きよげ」と評する対象として、顔とそれ以外を別に扱うべきである。また、そのように評する者が、語り手と登場人物の場合で分けるべきである。同一人物に対して、「きよら」と「きよげ」の両方の用例がある場合には、一級、二級の区分は当てはまらないであろう。この区分に異議を唱える論として、藤田加代氏「「きよげ」「きよら」再考その2．源氏物語における用例を中心にして」『高知女子大学保育短期大学部紀要』第十七号一九九三年がある。「きよら」は「きよげ」よりも美的優位性はあるが、必ずしも一級、二級ではないと考える。詳細は別稿に譲りたい。

（2）該当用例を含めて、薫に対して「きよら」の用例は三例（否

定形を除く）で、「きよげ」は五例である。薫に「きよら」がないとされた匂兵部卿巻の用例を境に、その前の幼少期は「きよら」、それより後の成人後は「きよげ」とされている。幼少期と成人になってからで美的評価が変更された人物は、薫以外には存在しない。

（3）長野まり子氏「ひかりかくれたまひにし後」――後編の世界――」『大谷女子大国文』第十二号一九八二年三月

（4）三枝秀彰氏「薫試論――その主題的に内実とするもの――」『中古文学』第三十五号（和泉書院）一九八五年五月

（5）前掲長野まり子氏、三枝秀彰氏論文以外のものとして、宮田恵子氏は、「成人した薫は、源氏の正統たる匂宮の「清ら」と対照して、あくまでも「清げ」の人として描かれている。血統的には当然「清ら」を有して然るべき人であり乍ら、作者は敢て薫に源氏系の「清ら」を与えまいとしたのでもあろうか。出生にまつわる宿命的な暗さを負うた薫は、その美に於ても柏木の影を逃れる事が出来なかったのであろう」とされている。

宮田恵子氏「源氏物語に於ける「清し・清ら・清げ」」『学習院大学国語国文学会誌』第二号一九五八年三月

（6）語り手から特定人物に対して「きよら」、「きよげ」と評する場合は、客観的な評価である。それに対して、物語の登場人物が、ある人を「きよら」、「きよげ」と思う場合は、その人物の主観が入っており、特に語り手の評価と異なっている場合は、そう感じる人の意識が作用しているといえよう。人の意識が作用すると、美的評価が相対的なものになる。

（7）『源氏物語』において、「きよら」の用例は百十三例である。「きよげ」の用例は八十四例である（「ものきよげ」を含む）。「きよら」と同義語の「けうら」は、七例ある。登場人物が、人に対して「きよら」または「きよげ」と評した用例は、会話文や心内文だけに見られるのではなく、地の文でも「見たまふ」のように、特定人物からの評価とすることができるものも同様である。本稿では、男性に対する「きよら」、「きよげ」を考察対象とする（宮島達夫編『日本古典対照分類語彙表』（笠間書院）二〇一四年、『源氏物語語彙用例総索引』（勉誠社）一九九四年を参照）。

（8）語り手により、源氏は次のとおり誕生の頃から「きよら」と評されている。語り手の四例以外では、自己評価は二例あり、自分以外の登場人物からは、女五の宮が二例、桐壺帝、頭中将、柏木、紫の上、玉鬘、大蔵卿の各一例、それ以外は女房や供人などの周りにいる人々の四例である。

世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。（桐壺巻18頁）

（9）源氏に対する「きよげ」の用例は、もう一例存在するが、次のとおり葵の上から見た、源氏の装束に対するものである。

かたへは、かくもものしたまふぞ」など聞こえおきたまひて、いときよげにうち装束きて出でたまふを、常よりは目とどめて見出だして臥したまへり。　（葵巻45頁）

(10)「きよげに」について、河内本と阿里莫本では「きよらに」とされている（池田亀鑑編著『源氏物語大成』による）。本稿では「きよげに」として扱う。

(11) 玉鬘が、同様に源氏は「きよら」であると思っていることが、次の用例からも読み取ることができる。

①月の明きに、御容貌はいふよしなくきよらにて、ただかの大臣の御けはひに違ふところなくおはします。かかる人はまたもおはしけりと見たてまつりたまふ。かの御心ばへは浅からぬも、うたてもの思ひ加はりしを、これはなどかはさしもおぼえさせたまはん、いとなつかしげに、思ひしことの違ひにたる恨みをのたまはするに、面おかん方なくぞおぼえたまふや。　（真木柱巻385頁）

②濃くなりはつまじきにや」と仰せらるるさま、いと若くきよらに恥づかしきを、違ひたまへるところやあると思ひ慰めて聞こえたまふ。　（真木柱巻385頁）

共に、玉鬘は冷泉帝を「きよら」であると思い、源氏と瓜二つで異なるところがないとしていることから、玉鬘にとって源氏も「きよら」ということになる。この時点では玉鬘は髭黒と結婚したことで、源氏との関係は過去のものとなる。同時に、源氏を髭黒と比較して、改めて源氏は優雅で美しいと感じ、養父としてふるまう源氏を好ましく思っている。

(12) 福井佳代子氏「源氏物語における人物評価に関わる美的語彙の研究 ――「きよら」「きよげ」を中心に ――」『国文橘』第三十八号（京都橘大学）二〇一二年三月

(13) なぜ匂宮に対して語り手から「きよげ」とされたのかについては、検討の必要があるが、本稿では指摘にとどめる。

(14)「きよげに」について、河内本、保坂本、陽明家本では「きよらにて」とされている（池田亀鑑編著『源氏物語大成』による）。本稿では「きよげに」として扱う。

(15) 前掲福井佳代子氏論文では、「身内の長男による視点」として、「父親としての理想像から離れた若々しい光源氏の姿が、夕霧の目、心に即して「若くきよげになまめきて」と描写されている」と記されている。既述のとおり、身内というよりも、夕霧の意識から「きよげ」に映ったと解すべきである。

(16) 自分のことを「きよら」と評した人物は、源氏だけである。

(17) 当時の鏡は和鏡と呼ばれるもので、直径十センチほどの小型のもので全身を映すものではなかったとされている。

(18) 源氏が「きよら」であると思った人物としては、他には朱雀院で二例ある。自分が須磨に流謫されている時に、花の宴における、当時東宮であった朱雀帝を回想した場面（須磨巻212

頁）と、朱雀院が出家後に、黒染の姿で女三の宮に会いに来た場面（柏木巻304頁）である。共に朱雀院の顔ではなく、姿に対して「きよら」とされている。

(19) 夕霧は赤子の頃に、「若君の御まみのうつくしさなどの、春宮にいみじう似たてまつりたまへるを見たてまつりたまひても」（葵巻43頁）と、「若君見たてまつりたまへば、こよなうおよすけて、笑ひがちにおはするもあはれなり。まみ、口つき、ただ春宮の御同じさまなれば」（葵巻77頁）と、冷泉帝に酷似していることが描かれていた。源氏の視点であり、冷泉帝は源氏にそっくりであるので、夕霧も同様である。

(20) 光源氏と「鏡」の関係は重要であるが、ここではこの程度にとどめる。

(21) 新編頭注にて、「語り手の言葉」として「源氏の我ぼめ」と記されている。

(22) 夕霧には、「きよら」と評された用例が十一例あり、そう評価された時の夕霧の年齢は、十代から五十代までとなっている。

(23) 夕霧を「きよげ」とした用例は、語り手からは二例あり、蹴鞠の場面である。他には、落葉の宮の視点で、次のとおり一例ある。落葉の宮が夕霧と契りを交わした直後であるので、そのことが影響しているのであろう。三例すべて、夕霧の姿に対して、「きよげ」としている。

男の御さまは、うるはしだちたまへる時よりも、うちとけてものしたまふは、限りもなう清げなり。故君のことなることなかりしだに、心の限り思ひ上がり、

（夕霧巻480頁）

(24) 冷泉帝に対して「きよら」と評した用例は五例で、うち登場人物の視点では、藤壺と玉鬘からのものである。冷泉帝の「きよら」は、源氏にそっくりであることと対になっている。源氏との関係性を暗示するキーワードとしての役割を持つ言葉で、源氏が使用する「きよら」とは異なるものであろう。

(25) 薫を「きよら」だとした、もう一つの用例は、語り手からのもので、次のとおり「御名」に続くものである。匂宮と薫の評判に対するもので、本人そのものについてではない。

当代の三の宮、その同じ殿にて生ひ出でたまひし宮の若君と、この二ところなんとりどりにきよらなる御名とりたまひて、げにいとなべてならぬ御ありさまどもなれど、

（匂兵部卿巻17頁）

(26) 拙稿「『源氏物語』薫の「知らず顔」再考」『同志社女子大学大学院　文学研究科紀要』第十九号二〇一九年三月

(27) 玉鬘の顔について、語り手から、「若うきよげ」であると評されている（竹河巻77頁）。しかし、次の用例では語り手から、夕顔と比べて「きよら」と記されている。これは、単に玉鬘の顔が「きよら」というのとは異なる。特定の人と比較

して「きよら」という語が用いられた場合には、美的評価の基準は特定の人である。他人と比べずに「きよら」だとされた場合は、その基準は、そう評する人が思う美的基準である。同じ「きよら」でも意味は異なるといえそうであるが、詳細は別稿に譲る。

母君よりもまさりてきよらに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり。（玉鬘巻92頁）

(28) 大山正氏は、知覚と認知の研究について、ブルーナーの「仮説」の理論があり、知覚過程は、基本的に次のステップの循環よりなっているとし、見る人の意識によって見え方が異なってくると論じられている（『視覚心理学への招待――見えの世界へのアプローチ――』（サイエンス社）二〇〇〇年十一月）。

①知覚者は、期待ないし仮説をもっている。つまり、何か特定のものを見たり聞いたりするように、ある程度準備している。

②環境から情報が入力される。

③環境からの入力情報によって知覚者があらかじめ持っていた仮説が確認されるかあるいは仮説との不一致が生じる。不一致の場合には、仮説が修正される。

(29) 薫が誕生して間もないころに、老女房から「めづらしうさし出でたまへる御ありさまの、かばかりゆゆしきまでにおはしますを」（柏木巻301頁）と話すのを、女三の宮が耳にして辛く思う場面があった。この女房は、薫を源氏の子であると思っている。また、源氏よりも年上であろうから、源氏が「ゆゆし」と評されたことを知っているといえよう。

(30) 源氏に対して「ゆゆしうきよら」とされた用例が、地の文で次のとおり一例ある。「ゆゆし」という語が、「きよげ」と結びついた用例はない。

たたずみたまふ御さまのゆゆしうきよらなること、（須磨巻200頁）

(31) 該当用例は、冷泉帝「うち笑みたまへるがいとゆゆしううつくしきに」（紅葉賀巻329頁）、夕霧「若君のいとゆゆしきまで見えたまふ御ありさま」（葵巻43頁）、明石の女御「児のいとゆゆしきまでうつくしうおはすることたぐひなし」（澪標巻290頁）となっている。